

これから播く

暖地向き牧草について

安孫子六郎

八月の声を聞けば秋播牧草を播く準備にからなければならない。

乳価安に酪農家は「コスト」の引下げに一層の研究が必要となるが、その対策として自給飼料の増産が緊急である。

耕地の狭い集約度の高い府県暖地の経営を前提としていかなる種類の牧草を選定したらよいかは誰しも頭を悩ますのである。次に有望と思われる二~三の牧草について少しく愚見を述べることにする。

◎まめ科牧草

クリムソンクロバー(べにばなつめくさ)

このクロバーは近年各地に試作され、頗る好評を博している。その理由とすることは次の通りであろう。

(1) 早春に生育をはじめ、クロバー類中最も早く収穫ができる、かつ収量が多く、家畜の嗜好性が良い。

(2) 一年生牧草で開花盛期に刈取れば再生しないから後作として陸稲、甘藷、玉蜀黍、落花生、スークラングラス等各種の夏作物の作付に極めて好都合である。

(3) 軽鬆土のような比較的瘠薄と思われる水田の裏作としては半湿田や肥沃なる

土地によく生育する。肥沃な沖積土には案外と成績がよくないので、今まで各種クロバー類の成績の香りのない火山灰土等に向かうので畑作地帯には甚だ有望である。いわゆる『畑のレンゲ』といわれるのである。

(4) 日陰性が強く直立性であるから五月中旬頃までに収穫完了するので、麦類の間作、桑園の間作には最適のものである。

(5) 無雪地帯において耐寒性が最強であるルーサンに匹敵する。湿雪地帯では、越冬が弱いように報告されているが、赤クロバーの越冬する地方ならば安全である。

(6) 最近の研究によれば、磷酸欠乏土壤によく生育する。すなわち磷酸の吸収力が強いことが報告されているので、火山灰土地帶ではクロバー類中最高の収量を上げ得る。しかし磷酸を施用しなくてもよいという意味ではなく、磷酸肥料の効果の少ない土壤によく繁茂するということである。

(7) 自家採種が容易である。



開花期におけるクリムソンクロバー (5月中旬)

クリムソンクロバー生育状況 (4月30日)

栽培上の注意

に根は邪魔にならず作業上容易である。以上のごとき特性を有しており今後畑作地帯にどんどん普及されて行くことを確信される。

(1) 播種期: 関東を中心として考察すると

きは九月中旬~下旬で十月以降になると収量は激減する。越冬の限度は月末であるが、経済的な収量を確保できない。

(2) 肥料: 多收を望むときは、堆肥の多用を必要とするが、普通堆肥反当三〇〇貫~四〇〇貫、熔燐六貫、過石四貫、石灰窒素六貫、カリ二貫程度で一、五〇〇貫以上の青刈飼料を収穫できる。

(3) 播種法: 条播がよい。畦幅二尺前後で

よいが間作として青刈麦類を播くとよいので、二尺五寸くらいにした方が便利な場合もある。すなわち九月中旬前述の畦幅でクリムソンを条播し土壤水分が適当であれば五日~七日で発芽が揃うから一~二度中耕除草して十月下旬~十一月上旬までにその畦間に青刈麦類を条播する。かくすると冬中麦類はクロバーを保護して越冬し、翌春青刈麦類とともにクロバーを刈取つて配合のよいまめ科いね科混合の青刈飼料を得る。また実取りの麦類の栽培もできるが、収量は二割程度相互に減収するが、クリムソンの青刈収量は千貫程度を確保できるので必ずしも損な組合ではないと思う。大麦等との間作が漸次実行されている。クリムソンの刈取り後は、甘藷、玉蜀黍等を間作す

ることは一般麦作と同様であつて、いま

まで利用しないで遊んでいた冬季から早春の期間に一作収穫できることになるのであるから有利な方法であろう。

(4) 播種量：クロバー類中で種子は大きい方であるが、反当三听（六合七合）程度でよいが、一升程度（三听）を播けば安全である。九月中旬頃にはときどき豪雨にたたかれると発芽障害を起したり、その数の生育が悪いことがあるから、豪雨があるような年は稍多いくらいに播く。

(5) 方が安全である。特に注意すべきは覆土の厚いことで、発芽に悪影響を与えるからである。

いが、霜柱の強い土地では三~四回踏圧を行。除草中耕もときどき行う。三月上旬には硫安のような窒素肥料あるいは牛尿等を若干追肥すると収量の増加に役立つ。

(10)
収穫：冬期温暖な地方では三月上旬から收穫期に入るが関東地方では四月下旬乃至五月上旬が適期である。すなわち開花期であるが、開花前にすでに相当繁茂しているから花蕾が一つ二つ見え初める頃から逐次刈取る。開花前に刈取れば再生を促すことができるが、総体の収量は適期一度刈りに及ばない。

家畜の頭数に対して余るような見透しのときは一斉に刈取り、サンマーサイレージを作る。あるいは後作を急ぐときもまた同じである。これが乾草調製は架かけなどを行わねば地乾ただけではよい乾草はできない。

◎青刈麥類

エンバク(オート)

(7) 混播：クリムゾンといね科のイタリアンライグラスとは収穫期が合致するから混播すると非常に増収する。混播する場

合は撒播がよく、反当クリムソン一听得
二听得、イタリアン二听得、三听得を混合して
撒播する。作条して播くときは同一畦に
播かず、前述の青刈麦類と同様に間作と
した方がよい。イタリアンをクリムソンと
発芽約一ヵ月後に畦間に条播する。同一
畦に播くと、クリムソンの生育はイタリ
アンに圧倒されて面白くない。

家畜に與える場合の注意

量は一、五〇〇貫で、一〇〇〇貫である。イタリアンと混播（撒播した場合）は二、五〇〇貫の成績もある。

播種期	一月五日	收反量當
一月二十日	一月三十日	播種期
一月二十五日	二月四日	收反量當
一月三十日	二月九日	播種期
二月六日	二月十四日	收反量當
二月二十日	三月三日	播種期
二月二十五日	三月八日	收反量當
二月三十日	三月十六日	播種期

第一表 エンバク播種期別收量表
 (刈取期 出穗前四月上)

品種名	収量
岡山黒	一〇九五貫
ゴールデンクライスデール	五三五
ゴールドアルゼンレーヴィヤン	八二〇
ノーラーティッシュ	三三〇
レッドアルゼンリヤン	二二〇
カナルバ	一三五
カンドリーユソンモ	六七五
カシラ	九九〇
R六六二	五五〇
カルバ	一七一
ソンブン	一〇〇

第二表は秋播種であるが、ほとんど枯死したが見るべき収量のものがある。すなわち岡山黒、R一二二〇六、ノッティクス、カントリーコンモン、シャープ、カルバーン等いずれも春播性に勝つており、早期収量が大である。四月上旬に青刈飼料の端境地に極めて重要である。

春播種と雖も刈取期を五月上旬にもつて行けば千貫以上の収量に達する特長があるので、青刈飼料作物計画を立てる上に大いに利用価値はある。また九月下旬から十日上旬に播種して十二月上旬より下旬にかけて刈取るには直立性の草姿をとる春播種

の考察を加えたい。府県にては従来エンバクの種子が生産されることが多いので、ほとんど北海道産に依頼している状態でま

る。北海道産として著名なビクトリー種や前進種はいわゆる春播種であるので時とて当地方（千葉県）では冬枯れに遭い思ひぬ支障を来すことがあるので、冬枯れの防止法を考えねばならぬが、その一方法として春播種を晩播きすることで救われる。

播種期		收量 當量
月	日	
一月	五日	
一月	一〇日	
元	五(貳)	
月	日	播種期
一月	三五日	
一月	三〇日	
四	三〇(貳)	

一〇月	五日	三三	二月	四日
一〇月	二十日	六	二月	九日
			三月	三日
			四月	八日
			五月	二十一日

いが、十月二十五日以降は枯死株なく前記の
のような収量があつた。四月十五日の収穫
は収量的には少ないが、茎葉硬化せず最も
栄養の高い時期と判定される。すなわち此
海道春播種は当地方においては十月二十二
日以降十一月十日頃までに播けば越冬はま
ず心配ないことは前年の成績をも併せて考
察される。

しかし利用の面からは越冬や冬枯れがないという点だけからでは解決できない。すなはち早朝又量ができるかの早朝又量がどう

いことが重要であるので、越冬が完全で目標収量の多いものが要求される。これらの品種に秋播きエンバクを撰ぶ必要がある。

下旬及び六月上旬に行われた。

地方により多少違うかも知たないが、原則的な問題としては全くわれわれの経験に

ればかなりの乾燥地でもできる。湿润地でもよく繁茂し、水田の中播き等にも利用される。

(5) 種子はよく発芽する、種子の生産量も多く自家採種も容易である。

収量 適期一番刈で反当千五百貫くらいは普通であるが、実用上出穂直前に刈取ることが草質もよく、その後の再生がよい。五回刈で三千貫程度の収量を上げ得る。刈取り後に窒素肥料の追肥特に牛尿の撒布がよい。

肥料 堆肥三〇〇貫、熔鉱八貫、硫安五貫程度を基肥として、刈取り毎に硫安二貫目か牛尿を二〇〇貫程度追肥すると軟かい良質の青刈りを連続的に刈取ることができる。イタリアンはよく繁茂し、でき過ると倒伏することがあるから、稍早期に刈取るが、牧草地ではトールオートグラスを若干混播するといい。

A black and white photograph showing a dense tuft of long, thin, light-colored grass or reed blades. A small, rectangular piece of paper with handwritten text is inserted vertically among the blades. The paper appears to be a label or a sample identifier.

(3月) イタリアンライグラス
播種量 反当条播の場合に一尺幅で二明
（二升余）撒播では四听程度である。覆土
は浅いことが大切である。オーチャードグ
ラス等と混播するときは一听を混播すると
早期収穫を行ひ得る。またクリムソンクロ
パーを混播するときは多量の青刈りを得る
が、クリムソンの播種期に合致せしむるた
め九月中下旬に播かねばならない。
イタリアンの跡地は根群が発達している



エンバク岡山黒(5月10日)



エンバク岡山黒(3月15日)

また『エンバク播種期と刈取期別二度刈試験』で一番刈の適期は（四国普通寺市）

九月播は……十一月～一月
十月播は……十二月～三月
十一月播は……三月～四月始
であると報告されており、眞に参考になる
ことである。

青刈麦類は他の牧草と異なり作り易いが栽培上の問題にも未解決な点が多く、これらを掘り下げてみると實に多くの利益を得るのである。

品種的に見ても春播種の冬の刈取りと晚春の利用、秋播種の場合は早春の利用等、前後作の関係を考慮し青刈飼料の平均生産については春播種と秋播種の組合せや早播き遅播き等播種期の問題等体系づけると興味が深く、実用上の価値が生まれて来ることを確信するものである。

イタリアンライグラス
き遅播種等播種期の問題等体系づけると興味が深く、実用上の価値が生まれて来るこ^トを確信するものである。

関係についての報告を要約すれば「エンバクの一番刈は高刈とする方が一番二番合計収量が大となる。寒さの強い時期の刈取りは、特に低刈であると枯死するものが多くなるから低刈をさけねばならぬ」と報告されている。

(2) 暖地向きの一年生いわ科牧草として頗る好評で、最近栽培面積が著しく拡大されて来た。その理由として、
(1) 耐寒性強く再生の旺盛で、早春から雨期明けまで数回以上刈取りができる。再生速度が早い。
期は豚、鶏も好食する。

(2) 家畜特に乳牛の嗜好がよい、軟かい時
期は豚、鶏も好食する。

低刈は二穂中刈は十穂と十四穂で、高刈は十八穂及び三十穂で、供試品種はゴルドレーベン及びビクトリーである。十月十二日に播種し、刈取期は一番刈を一月二十日及び二月二十二日、二番刈は五月中

(4) 播種期は九月上旬から十一月下旬に至り前後作の関係上有利である。すなわち何時でも播けるから好都合である。



イタリアンライグラス（5月15日）



イタリアンライグラス（3月15日）

播種期 播種期間の幅は広い。すなわち九月上旬から十一月下旬に至るが、最高の収量を得るには、九月中旬より十月中旬がよい。八月中旬に播種すれば十二月上旬には反当二〇〇貫くらいの一番刈を刈取ることができる。

肥料 堆肥三〇〇貫、熔燐八貫、硫安五貫程度を基肥として、刈取り毎に硫安二貫目か牛糞を二〇〇貫程度追肥すると軟かい良質の青刈りを連続的に刈取ることができ。イタリアンはよく繁茂し、でき過ると倒伏することがあるから、稍早期に刈取るが、牧草地ではトルオートグラスを若干混播するよ。

播種量 反当三播の場合は二尺幅で二升(二升余)、撒播では四升程度である。覆土は浅いことが大切である。オーチャードグラス等と混播するときは一升を混播すると早期収穫を行ひ得る。またクリムソンクロバーを混播するときは多量の青刈りを得るが、クリムソンの播種期に合致せしむるため九月中下旬に播かねばならない。

イタリアンの跡地は根群が発達しているので用力耕耘に労力を要するが、土用に至り草勢の衰えたとき耕耘すれば楽であり、ほとんど枯死して丁う。イタリアンの利用法は、できるだけ回数を多く頻繁に刈り取り、雨期明けに耕耘反転して後作として飼料かぶを播く。畜力、機機力にて耕耘するときは、早春より五月下旬まで青刈をして利用し、跡地を耕耘して夏作物に代えることもできる。いね科牧草の跡地は概して肥沃になり成績がよい。暖地向き一年生冬作牧草としていね科ではイタリアンライグラスの栽培を試みることは極めて有利である。